

続

いのちを  
つなぐ  
ひとたち

vol.30

国立国際医療研究センター国際医療協力局 専門職／  
前 WHO 西太平洋地域事務局 リプロダクティブ・  
妊産婦・新生児・小児・思春期保健課 技官

## 永井真理さん

### WHO の正常出産ガイドラインで 女性が尊重されるケアを

2018 年、WHO (世界保健機関) は、22 年ぶりに正常出産のガイドラインを改め、このほど医学書院よりその日本語版『WHO 推奨 ポジティブな出産体験のための分娩期ケア』が刊行された。永井さんは前 WHO 職員としてその監訳を担った。このガイドラインはリプロダクティブ・ヘルス/ライツの実現に通じるものだという永井さんに、豊かな国際的医療協力のご経験や WHO ガイドラインの詳細をお聞きした。

インタビュー・構成・撮影：河合蘭

**ながい・まり** 東北大学医学部医学科卒業後、総合内科専門医を取得。1999 年より国境なき医師団などからスリランカ、イラン、アフガニスタンへ赴任。2003 年より米国留学、公衆衛生学修士を取得。2006 年から国立国際医療研究センター国際医療協力局に所属し、カンボジア、セネガルなどに長期赴任して保健省を支援。厚生労働省国際課にも勤務。2015～2018 年に WHO 西太平洋地域事務局に赴任し、リプロダクティブ・ヘルスと母・新生児保健に関する各種 WHO ガイドライン作成に携わった。

### 旅への思いから 国境なき医師団の活動へ

子どもの頃、母親に「結婚しても夫に経済的に頼らない人生を歩みなさい」と言われて、医師という職業を選びました。本当は歴史や文学について学びたかったのですが、資格を持っていれば自分の暮らしを自分で決めることができると考えました。

内科医になり、しばらくは白血病や悪性リンパ腫などの患者さんを治療し、日々充実していましたが、365 日働いていたので好きな旅をする時間

がありません。そんな時、国境なき医師団を知って、病院を辞めました。子どもの頃から引越しが多かった私は、知らない土地へ行き、その文化を理解していく過程が大好きだったんです。

国境なき医師団で行ったのはスリランカとイランです。スリランカでは内戦のただ中にある村の人たち、イランではアフガニスタンの内戦から避難してきた人たちを診察しました。若い人がとても多く、妊婦さんや赤ちゃんの診察を頻繁にするようになりました。正常産は地元の助産師さんをお願いし、医学的問題がある人は産婦人科医のいる遠くの病院に紹介しましたが